

吉原雀 (筐花乎向橋)

三挺立

素見ぞめきは掠鳥の

群れつつきつゝき格子先

叩く水鶏の口豆鳥に

孔雀ぞめきで目白押し

見世すががきのてんでとんとん

サツサ押し

馴れし廓の袖の香に

見ぬやうで見るやうで

客は扇の垣根より

初心可愛ゆく前渡り

「サアサ来たぞ」来たぞよ

「さア来たまた来た

」ナニさしがあると

「さはりぢやないか

」さしもすさまじいわ

「またおさはりか

」おいせんしう頼むぜ

「お腰のものも合点か

」ソレからかさそこへ置くぜ

「二階座敷は

」カウ右か左か

「ずっと奥座敷でござります

「しんぞそさまは

寝ても覚めても忘れぬ

「どうぞ二人がこつそりと

深山の奥のその奥の

ぐつとの奥の佗住居

「憎いぞへ

「さうした黄菊と白菊の

同じ勤めのその中に

「きりと呼べるゝ果敢なさは

「年が明くのを待兼ねて

「やっぱりしたばと呼ばれたく

男故なら楽しみに

「苦界する身を立てるとて

「義理一遍のあだつきは

「結句心のもめる種

「勤める身も素人も

「女子に二つはないわいな

「よしてくれ」よしてくれよ

「吉原雀の雛から飼はれて

「山雀小雀のくちばしなんぞで

「てれんの初音を

「聞いてもくんねえ

「つそどりやないとの日文の駒鳥

「俳優(わざをぎ)の昔を今に教草

吉原雀の古事を

こゝに移して

三つ扇

誰も三升とやつし事

「凡そ生けるを放つこと

「人皇四十四代の帝

元正天皇の御宇かとよ

養老四年の中の秋

宇佐八幡の託宣にて

諸国に始まる放生会

「浮寝の鳥にあらねども

「今も恋しき独り住み

小夜の枕に片思ひ

可愛い心と酌みもせて

何ぢややら憎らしい

「其手で深みへ浜千鳥

通ひ馴れたる土手八丁

口八丁に乗せられて

沖の鷗の二挺立ち

そこらの目白が

見つけてせきれい

〽約束雲雀は昼でもよしぎり

一寸格子へ顔とり出せとは

さりとはひわ鳥

〽鶯の

魂胆秘密は手管のくだかけ

奇妙鳥類

籠の鳥

〽わけも何やらをかしらし

〽実に花ならば桜時

月なら最中竹村に

その青楼の名にし負ふ

新吉原という雀

今に噂や残るらん。